



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

GB理論の入門書

著者	中井 悟
雑誌名	主流
号	53
ページ	153-172
発行年	1992-02-25
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015100

GB 理論の入門書

中 井 悟

I はじめに

どの分野のどんなに偉い学者も、最初は素人であった。アインシュタインも、生まれた時から物理学の大家であったわけではない。あのチョムスキーも、最初は誰かに言語学の手ほどきをしてもらったはずである。

素人を専門家に仕立てあげるためにまず必要なのがよい入門書である。アインシュタインも物理学の入門書を読んだであろうし、チョムスキーも言語学の入門書を読んだにちがいない。本稿は、生成文法、特に、GB 理論（正式には、Government and Binding Theory というが、チョムスキーの意向に従えば、Principles-and-Parameters Approach と呼ぶべき理論）の入門書について少し考えてみようとするものである。

II GB 理論の難解さ

生成文法は、公式的には1957年の *Syntactic Structures*¹ の出版に始まり、標準理論 (Standard Theory)、拡大標準理論 (Extended Standard Theory)、改訂拡大標準理論 (Revised Extended Standard Theory) と発展し、現在は、GB 理論 (Government and Binding Theory)、あるいは、原理と変数の理論 (Principles-and-Parameters Approach) と呼ばれる理論がその主流である。この発展の間に、生成意味論 (Generative Semantics) や格文法 (Case Grammar) というチョムスキーに反対する理論も一時もてはやされたし²、現在も、語彙機能文法 (Lexical Functional Grammar) や一般化句構造文法 (General-

ized Phrase Structure Grammar) といった理論が GB 理論と競合している³。しかし、なんといっても、現在の言語学の統語論の主流をなしているのは GB 理論であるから、言語学を志すものならば、GB 理論についての一通りの知識は必要である。

統語論を志すものにとって GB 理論は必須であるが、GB 理論はなかなかとっつきにくいようである。GB 理論は難解だという印象が強いのである。これにはいくつかの理由があるであろう。一つには、チョムスキーが言語の文法は数学のように演繹体系をなすと考えていることによる。演繹体系であるからには、文法の原理や規則は、数学や記号論理学の用語を使って、厳密な公式として表現される。例えば、次のような公式を見せられれば、初心者には誰でも躊躇してしまうであろう。

- (i) α is X -bound by β if and only if α and β are coindexed, β commands α , and β is in an X -position.
- (ii) α is X -free if and only if it is not X -bound
- (iii) α is locally bound by β if and only if α is X -bound by β ; and if γ Y -binds α then either γ Y -binds β or $\gamma = \beta$
- (iv) α is locally X -bound by β if and only if α is locally bound and X -bound by β ⁴

もう一つの理由は、GB 理論の単純さかもしれない。GB 理論はモジュール化された極めて単純な一般化された形で述べられたいくつかの原理 (principle) と変数 (parameter) の体系であり、これらの原理の相互作用によって文が生成されたり、排除されたりする仕掛である。原理が単純になればなるほど、それらの相互作用が逆に複雑になっていくということが考えられる。数学も単純ないくつかの公理から出発して複雑な演繹体系をつくりあげているわけであるから、GB 理論も同じように複雑だと思われても仕方がないであろう⁵。

かつて、生成文法学者は、著書や論文に、*Chicago Which Hunt*⁶とか、*You Take the High Node and I'll Take the Low Node*⁷とか、*Everything that Linguists have Always Wanted to Know about Logic, but were ashamed to ask*⁸とか、“The Penthouse Principle and the Order of Constituents”⁹とかいう題名をつけて楽しんでいましたが、そのようなおおらかな時代（特に、生成意味論の時代）は過去のものとなっており、現在のGB理論は、細身の神経質な秀才型の学者がくそまじめに、重箱の隅を楊枝ではじくるように、研究しているといった感じである。¹⁰

Ⅲ GB理論の入門書の特質

たとえ難解だという印象があっても、GB理論は現在の統語論の主流であるから、言語学を勉強しようとする学生達はそれを習得しなければならないし、教師はそれを教えないといけない。その際に助けになるのが入門書や解説書である。

入門書について考える場合に、まず、どのレベルの学生を対象にしているかという問題がある。¹¹この問題は、別の言い方をすると、いきなりGB理論を教えるのか、それとも、まず標準理論を教えておいて、その次にGB理論を教えるべきかという問題である。従来、一般に採用されてきた方法は、後者の方法である。まず、標準理論の枠組み内で、句構造規則、変形規則（受動変形、疑問文形成変形、関係節形成変形、主語上昇変形、Tough移動変形など）、変形規則の順序づけ、変形規則の循環適用などを教えておいて、次に、Rossなどの変形に対する制約を教え、そしてGB理論に入っていくというやり方である。確かに、この方法で教えると、理論がどう変化してきたかがよくわかり、GB理論のいろいろな原理が提案された歴史的な背景がわかっているので、GB理論をよく理解できるということがある。¹²

しかし、生成文法も過去30年以上の発展の歴史を持つわけであり、標準理論から始める必要があるのかという疑問がわく。後に紹介する『一步すす

んだ英文法』という GB 理論の入門書のはしがきでも、著者達は、この問題にふれ、GB 理論を学ぶのに、過去の理論を学ぶ必要はないと言っている。

ある時期までの生成文法入門書は、理論のごく初期から説き起こすことが多かった。しかし、比較的若い学問領域とはいえ、生成文法も誕生以来30年以上を経ている。そのような書き方であると、たかだか10年、下手をすると15年前の理論的枠組みを紹介し終わったところでおしまいということになりかねない。

そこでこの本では、生成文法理論の予備知識をいっさい持たない読者をも想定し、なおかつそうした読者にこの理論の最前線の（少なくとも現時点—1989年初頭—において最前線の）姿をいわば読者に「ぶつける」ことを最大の目的の1つとした。現代の物理学を理解するのに必ずしもニュートン学説の紹介から出発する要がないのと同様、現行の生成文法理論の把握のためにこの理論の歴史をひもとくのは必須のことではないと考えられるからである。¹³

私自身も、この意見に賛成である。これだけ GB 理論が統語論で establish されている以上、最初から GB 理論を教えてもよいと思う。過去にどのような理論が存在し、理論がどのように変化してきたかは、生成文法史が扱うことがらであり、また、個別の構文論を研究する時に、過去の研究ということでふりかえってみればよいことであろう。（もちろん、過去の理論を教えた方が現在の理論を教えやすい場合には、過去の理論にもふればよい。）¹⁴

GB 理論の入門書について考える際に重要な次の問題は、到達目標である。対象が全くの初心者であれ、標準理論を終えた中級者であれ、入門書の最終目標は、読者に GB 理論全般の知識を教えることと、生成文法の方法論・分析方法を教えることである。その入門書を終了した段階で、現在の学界の最前線の研究論文が読め、理解できるようになること、そして、自分で英語

なり日本語の文法について分析・研究し、論文が書けるようになることが到達目標である。もちろん、いきなり専門誌に投稿できるような論文がかけられるはずがないが、ともかく、自分で分析して論文にまとめられるようにすることである¹⁵。

GB 理論の内容をどういう方法で、どのような順序で紹介するかは、それぞれの入門書の著者の考え方による。一般的には、まず、生成文法の（別の言い方をすると、チョムスキーの）基本的な考え方を紹介し、その後、Xバー理論から取り上げていくというのが常道のようなのである。ただ入門書の場合は、格理論とか θ 理論とかを個別に一つの章で全部紹介するということはできないはずである。GB 理論は、下図に示されるように¹⁶ モジュール化した各種の理論の相互作用なのであるから、各理論を順繰りに少しずつ、段々レベルを上げながら、なんども取り上げていくことになる。

入門書に関するもうひとつの問題は、よい練習問題がついているかどうかである。知識を身につけ、分析の訓練をするためには、練習問題は不可欠である。練習問題を解くことによって理解が深まり、分析の訓練ができるのである。しかも、その練習問題は、その解答が小論文になるくらい歯ごたえのあるものがよい。私は、学部学生の変形文法入門書として、Adrian Akmajian and Frank W. Heny, *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*¹⁷ を使用してきたが、この本は、変形文法の統語論の議論の仕方 (methods of argumentation) を教えるのが目的の入門書で、内容も読めば理解でき、かつ、練習問題がその本の目的に合うような、議論の訓練をさせるようなものである。練習問題の解答がそのまま小論文となるものである。この入門書は、1975年に初版がでているが、1980年に paperback edition がで、1986年の段階で5刷目である。内容は標準理論に基づいたものであるが、今だに使用されているのであるから良い入門書なのであろう。

さらに、入門書というものは、読めば理解できるものでなければならない。独学できるものでなければならないのである。教師が説明を加えねばなら

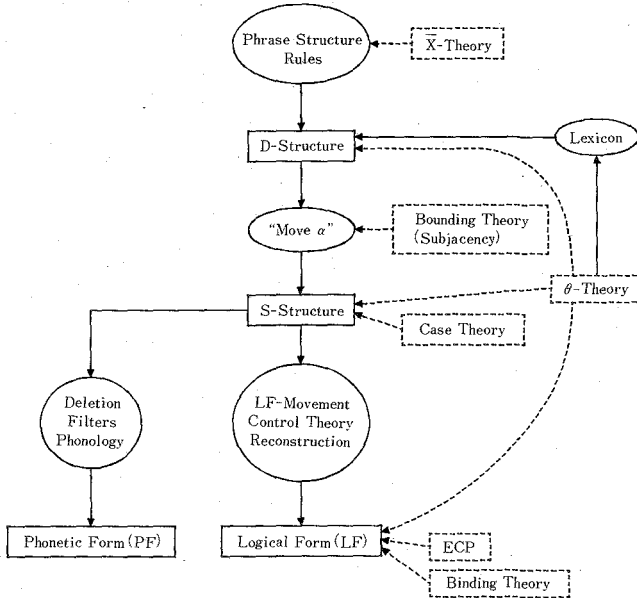


Figure 18.1
The organization of the modules of Government-Binding Theory

い入門書は欠陥品である。教師の役割は、練習問題の解答を点検することである。

入門書が満たさなければならないもう一つの条件、そして、一番重要な条件は、その入門書を読んだ読者に生成文法理論で言語を研究するのはなんておもしろいのだろうと思わせるくらい、その内容が魅力的なものでなければならないことである。具体的な例でこのことを説明してみよう。標準理論における変形規則の適用に関する ordering paradox の解消を取り上げてみる。¹⁸

次の(a)と(b)の文を派生する場合、

- (a) John believes himself to be an Arab sheik.

(b) I believe Mary to have hurt herself.

標準理論で、変形規則の循環適用というものを考えなければ、変形規則の適用に関して、ordering paradox が生じることはよく知られているところである。すなわち、(a)の文を派生するには、

- 1) Raising
- 2) Reflexivization

という順序で変形規則を適用しなければならず、(b)の文を派生するためには、

- 1) Reflexivization
- 2) Raising

という順序で変形規則を適用しなければならないのである。ところが、変形規則を循環適用すると、この ordering paradox がみごとに解消してしまう。このような例を見せつけられると、まるで手品を見せられているようで、変形文法とはおもしろいものだなあと感じるのである。

GB 理論の入門書にもこういうことを期待したいものである。もちろん、このおもしろさは GB 理論そのものから出てくるはずのものであるが、その提示の仕方も重要な役割を果たす。おもしろい話があっても、提示の仕方がまずければ読者は興味をおぼえないのである。同じ落語を前座がする場合と真打ちがする場合を考えてみれば、このことがよくわかるであろう。

IV GB 理論の入門書

では、具体的な入門書を取り上げて論じてみよう。GB 理論の入門書や解説書も数多く出回っているようであるが、私が目にしたものは次のようなものである。

Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory* (Ox-

ford: Basil Blackwell, 1991).

Howard Lasnik and Juan Uriagereka, *A Course in GB Syntax: Lectures on Binding and Empty Categories* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1988).

Andrew Radford, *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981).

_____, *Transformational Grammar: A First Course* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988).

Henk van Riemsdijk and Edwin Williams, *Introduction to the Theory of Grammar* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1986).

荒木一雄・小野隆啓, 『英語の輪郭—原理変数理論解説—』(東京:英潮社, 1991).

今井邦彦・中島平三・外池滋生・福地肇・足立公也, 『一歩すすんだ英文法』(東京:大修館書店, 1989).

中村捷・金子義明・菊地朗, 『生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ—』(東京:研究社出版, 1989).

GB 理論も年々変化しているから、特に、障壁理論¹⁹を取り入れていない1986年以前に出版された本は、時代遅れという感じがする。

英語で書かれたものとしては、一番最近に出版された Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory* を、日本語で書かれたものとしては、『生成文法の基礎』を、代表として取り上げる。

Introduction to Government and Binding Theory は、著者の Haegeman によると、対象は中級レベルの学生ということになっており、生成文法の統語論の概論的知識が前提にされている。Haegeman は、Preface で次のように述べている。

The book is aimed at intermediate students in linguistics. A general introduction to generative syntax is presupposed. Roughly, the reader would be expected to be familiar with notions such as competence, performance, informants and linguistic intuition, grammaticality, acceptability, autonomy of syntax, etc. and to be able to parse sentences using the tree diagram representation and the labelled bracketing format. The book presupposes some understanding of terms such as constituent, phrase, grammatical function, lexical category, etc., but this does not mean that such concepts and terms will be taken for granted entirely. On the contrary, part of the aim of the book will be to give the concepts and terms with which the reader is familiar more precise content by offering a coherent theoretical background.²⁰

しかし、この本を読んでもみると、言語学の概論書の統語論の章程度の知識で十分であると思われる。著者自身が Introduction の章の脚注 2 であげている、

Adrian Akmajian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer, and Robert M. Harnish, *Linguistics: An Introduction to Language and Communication* (3rd ed.; Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1990).

(Haegeman は1979年という初版の年号をあげている)

Victoria Fromkin and Robert Rodman, *An Introduction to Language* (4th ed.; New York: Holt, Rinehart and Winston, 1988).

といった概論書を終了したものなら、この入門書は十分に理解できると思われる。

この入門書の目的は、GB 理論の主流の紹介であり、最終的に読者が GB 理論の文献を自分で読み、理解し、それを評価できるようになることである。

Haegeman は、Preface で次のように述べている。

The purpose of this book is to provide an introduction to the mainline version of Government and Binding Theory, or GB-theory, using as a basis Noam Chomsky's more recent writings. Starting from the ideas developed in the *Lectures on Government and Binding* (1981), the book will include the most important notions and concepts of *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding* (1982), *Knowledge of Language* (1986a) and *Barriers* (1986b). Some of the concepts that were used earlier in the development of generative grammar but have become less relevant will occasionally be referred to and reference will also be made to some of the more recent developments of the theory. The aim of the book is not to make the reader familiar with all the literature published within the GB framework, but rather to enable him to read this literature himself, to understand it and to evaluate it independently.²¹

本書は、INTRODUCTION 以外に12章から構成されており、各章の最後には練習問題がついている。

著者は、英語の母語話者ではないらしく、英語の誤り (comma splice と呼ばれる誤りが特に目立つ) もあるが、英語自体は平易で外国人にはわかりやすい。

GB 理論の入門書の著者がしなければならないことは、チョムスキーが難解に書いていることを平易な表現に翻訳して解説することである。チョムスキー自身は、GB 理論の最前線で理論をできるだけ精緻なものにしようとしているわけであるから、厳密に理論を公式化して表現する。しかし、入門者には、チョムスキーのこういった表現は理解できないのであるから、入門者が理解できる表現に翻訳しなければならないのである。もちろん、Haeg-

man は、GB 理論の内容をやさしくかみくだいて説明しているし、その他、意識的にいろいろな工夫をしている。

まず、枝分かれ図が多いことである。これは入門書として非常に良い点である。生成文法の文献では、スペースの節約のために labelled brackets を使用するが、入門者にとっては、この labelled brackets はわかりにくいものである。特に、GB 理論では、統御 (command) とか統率 (government) といった支配関係が重要な役割を果たすので、枝分かれ図で表記してある方がはるかにわかりやすい。Haegeman は、ジュネーブ大学で教えたことがもたくなってこの本ができたと言っており、また、原稿段階でもジュネーブ大学の学生相手に試用したと言っているのです。そうした経験から意識的に入門者のために枝分かれ図を多用しているのであろう。

入門者用に考えていると思わせることは、基本的な概念を繰り返し説明していることである。ある概念を、一度説明したらそれっきりというのではなく、折りにふれ、何度も取り上げていることである。無駄なようなことであるが、入門者には繰り返し説明することが必要である。

さらに各章には、その章の要約 (summary) がついている。これも入門者にとってはありがたいことである。後で参照する場合に便利である。

こういう点から、618ページと大部な書物になっているのは仕方がないことである。

生成文法は、かつては、主に英語ばかりを研究対象とし、英語のみに基づいた言語の普遍性の研究に対し異議が唱えられたりしていたが²²、現在の GB 理論は多くの異なった言語に対し適用され検証されている。こうした動きは、この本の中でもみられ、11章でゲルマン系の言語の統語論の問題が、12章でロマンス系の言語の統語論の問題が取り上げられている。これは、ヨーロッパの学者の本らしい。ヨーロッパの学生がこの本を使う時に参考になる部分であろう。日本語で書かれた英語の GB 理論の入門書にも、GB 理論による日本語の統語論の解説があってもよいと思う。

英語で書かれた GB 理論の入門書としては、Radford の 2 冊がある。1981 年に出版された *Transformational Syntax* は、世界中でよく使われた入門書らしいが、その出版年からわかるように時代遅れとなっている。『英語の輪郭』では、この本のことを次のように評している。

3. [Radford の本のこと] などは出版当初、右に出る物など考えられないほどよくできた入門書であったが、今となっては時代おくれの感がいなめない。しかし、統語的議論 (syntactic argumentation) を学ぶ上ではいまだに良書である。特に変形の必要性を議論した第 6 章などは初心者にとって、統語的議論の進め方の手本として学ばれるべき部分である。²³

Radford の 2 冊目の 1988 年に出版された *Transformational Grammar* はより新しい入門書である。この本も非常にわかりやすい入門書であるが、この本を終えたからといって、すぐにチョムスキーの本が読めるというわけではない。著者自身がプロローグで次のように述べている。(プロローグは読者と著者の会話という形式で書かれている。)

READER: When I've finished this book, will I be able to go off and read the primary literature on Transformational Grammar? Will I be able to read through Chomsky's *Knowledge of Language*, for example?

AUTHOR: Well, you'll be able to read and understand parts of it. But not all of it. There are some more technical topics which are not covered in this book—as you'd expect from any *introductory* book.

READER: Is there a book which will serve as a transition between your introductory book, and the primary literature?

AUTHOR: Well, I'm working on a companion volume to this one which is intended to do just that: it's an intermediate/advanced coursebook, and provides a detailed discussion of recent work on Binding, Bounding, Chains, Empty Categories, Theta Marking, Case Marking, Logical Form, Parameters, etc.²⁴

Henk van Riemsdijk と Edwin Williams は、二人とも、GB 理論の最前線で活躍している著名な学者であるが、この2人が書いた *Introduction to the Theory of Grammar* は、1986年の出版で、障壁理論は取り入れられていない。入門書ではあるが、少し、程度は高い。²⁵

Howard Lasnik and Juan Uriagereka, *A Course in GB Syntax: Lectures on Binding and Empty Categories* は、少し変わった入門書あるいは解説書である。これは、Lasnik によるコネチカット大学における春学期の大学院の統語論のクラスの講義の録音を文章に起こし、それを編集してテキストにしたものである。対象は、標準理論を終えている中級レベルの学生であるが、クラスにおける質疑応答なども載せられていて、アメリカの大学のクラスの雰囲気伝わってくる。GB 理論の解説書として、GB 理論を少しかじった程度の人が読んでみるとおもしろい本である。

今度は、日本語で書かれた GB 理論の入門書として、中村捷他、『生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ—』を取り上げる。

本書は、GB 理論の入門書ではなく、解説書である。著者達は、「本書の目的は生成文法の入門・導入にあると言うよりもむしろ、チョムスキーなどの高度に専門的な研究書を読む手助けとなることを目的としている」²⁶ と言っている。従って、対象となっているのは、ある程度の生成文法の知識を持っている読者だと思われる。私の感じでは、標準理論はマスターし、GB 理論もいろいろかじったがもうひとつよく整理できず、理解できていないと

いったレベルの読者である。

本書は、5章からなっており、第1章が「生成文法の目標」ということで、どの入門書・解説書にもみられるように、最初に生成文法理論の基本的な考え方が紹介されている。第2章は、「統語論の基礎」ということで、やはり、生成文法の基本的な知識の紹介である。第3章の「GB理論」が本書の主要部ともいうべき部分で、GB理論のいろいろな理論や障壁理論のことなどが解説してある。第4章が「構文研究」ということで、NP移動構文、wh移動構文、右方移動構文などがとりあげてある。第5章は、「GB小辞典」ということで、GB理論で使われる用語がグロッサリーとしてまとめられている。

私自身の印象では、第3章は、各種の理論に関して、いろいろな説を紹介し、非常に要領よく整理してまとめてある。また、GB理論を勉強しはじめて、もうひとつよくわからないと思うことがらが、わかりやすく解説してあったりする。例えば、accessible SUBJECTとか*i*-within-*i* conditionなどは、なかなか理解しにくい概念であるが、それらを具体的な例で説明し、なるほどこういうことだったのかと思わせてくれる。また、各項目の最後には必ずまとめがあり、便利である。第5章にグロッサリーがあることとあわせて、この本はreference bookとしても利用できると思われる。

『一步すすんだ英文法』も、比較的平易に書かれた入門書である。枝分かれ図も多く使用してある。この本の特徴は、他の入門書のように、格理論の章とか θ 理論の章というようにGB理論の各理論ごとに章分けされていなくて、名詞句、分詞構文、命令文といった章があることである。このことは、著者達がはしがきで次のように述べていることからわかる。

もう1つの特徴は、この本が上記の“最新鋭”の理論的枠組みにおける「英文法」の書であるという点だ。第1章に述べるとおり、生成文法の究極の目的は普遍文法の探求にあるのであって、英語という個別言語

の文法記述にあるのではない。最近、生成文法の「英語離れ」を嘆く声が聞かれるが、この理論が目指すところからすれば、英語に限らず個別言語の詳しい文法記述との間にある程度の距離が生じているのはむしろ当然のなりゆきともいえる。しかし本書の執筆者を含めて、英語学をなりわいとし、かつ、生成文法を有効な言語理論であるとみなすものにとつては、当然のなりゆきとして済ますわけにはいかない。現行の理論的枠組みの内部で、英文法のどの部分がどのように合理的に説明され、どの部分はいわば一時しのぎの処理を受ける以外になく、またどの部分は本質的にこの理論になじまないものであるかを明らかにし、かつ、そのような考察を通じて生成変形文法理論の一層の発展に寄与することが英語学徒の責務である²⁷。

GB 理論の入門書・解説書として、荒木一雄・小野隆啓、『英語の輪郭—原理変数理論解説—』があるが、この本は、入門書としても解説書としてもおすすめできない。この本は、英語学入門講座・第1巻ということであるが、決して入門書ではない。GB 理論の説明も、チョムスキーの説明がそのまま引用されており、その引用の平易な表現へのパラフレーズもない。いろいろな専門用語が何の説明もなく使われている。この本の目的は、GB 理論で現在どういうことが問題になっているかを専門家に紹介することであろう。著者自身、

解説に当たっては、理論や原理の代表的なものだけでなく、新しい、しかし学界ではまだ完全に確立していないような提案、概念も取り入れた。これは本書が解説書プラス α の貢献ができればとの希望から出たものである。従って理論的整合性に欠ける部分があることも承知の上である²⁸。

と述べている。

V まとめ

以上、いろいろな入門書や解説書を読んでみて、気づいたことは、こうした入門書や解説書は実際に入門者を教えた経験に基づいて書かれるべきであるということである。GB 理論のどの部分をどういう方法で教えれば入門者に理解してもらえるかということは、実際に、教えてみないとわからないものである。こんなことはわかるだろうと思っていたことが、入門者には理解できなかったりするものである。教師が頭の中で作った指導案 (teaching plan) 通りに実際の授業はできないものである。

実際に教えた経験に基づいている入門書・解説書 (あるいは、原稿の段階で教科書として試用されたもの) は、読んでいてわかりやすいし、また、GB 理論のここがわからなかったというところがわかりやすく解説してあったりするものである。ここで取り上げた、Haegeman の *Introduction to Government and Binding Theory* も『生成文法の基礎』も、出版前に教室で試用されている。²⁹ よい入門書・解説書というものは、その理論に精通した人が、教授経験に裏打ちされて書いたものであろう。

注

- 1 Noam Chomsky, *Syntactic Structures* (The Hague: Mouton, 1957).
- 2 生成意味論とチョムスキーの解釈意味論の論争は、結局、チョムスキーの勝利で終わり、生成意味論は葬りさられたと思われていたが、最近、かつて生成意味論で主張されていたようなことが、GB 理論の LF で扱われるようになった。生成意味論の復活である。Fillmore の格文法も、生成文法の主流とはならなかったが、コンピュータによる翻訳では有効な統語理論として採用されていると聞く。また、GB 理論の θ 理論は格文法の主張を取り込んだ形になっている。
- 3 生成文法理論の歴史的変遷については、Frederick J. Newmeyer, *Linguistic Theory in America* (2nd ed.; Orland: Academic Press, 1986) を参照。
- 4 Noam Chomsky, *Lectures on Government and Binding* (Dordrecht: Foris Publica-

- tions, 1981), pp. 184–85.
- 5 チョムスキーは言語学を心理学の一部と考えているが、最近の GB 理論を見ると、GB 理論は理科系の学生向きであるという気がする。GB 理論を使いこなすには、論理的・数学的思考が不可欠のようである。
 - 6 Paul M. Peranteau, Judith N. Levi, and Gloria C. Phares (eds.), *The Chicago Which Hunt: Papers from the Relative Clause Festival* (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1972).
 - 7 Claudia Corum, T. Cedric Smith-Stark, and Ann Weiser (eds.), *You Take the High Node and I'll Take the Low Node: Papers from the Comparative Syntax Festival* (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1973).
 - 8 James D. McCawley, *Everything that Linguists have Always Wanted to Know about Logic but were ashamed to ask* (Chicago: The University of Chicago Press, 1981).
 - 9 John Robert Ross, "The Penthouse Principle and the Order of Constituents." 注7の書物に収録 (pp. 397-422).
 - 10 注6と7にあげたような題名の本をだしていた Chicago Linguistic Society (この学会の議事録を CLS と略す) であるが、最近の CLS の題名はまじめなものばかりである。
 - 11 この場合のレベルとは、学生の能力という意味ではなく、生成文法についての程度知っているかという意味である。
 - 12 例えば、John believes himself to be a genius in linguistics といった例外的格標示 (exceptional Case-making) 構文は、主語上昇変形を背景の知識としてもっていれば、理解しやすいかもしれない。
 - 13 今井邦彦・中島平三・外池滋生・福地肇・足立公也、『一步すすんだ英文法』(東京: 大修館書店, 1989), p. iii.
 - 14 最初から GB 理論を教えるとはいっても、後で紹介するどの入門書でも多少は標準理論についてふれている。
 - 15 このような目標をもたない入門書も当然考えられる。読者が GB 理論で論文を書くということを用意していない、GB 理論のさわりをやさしく教える本である。この場合は、GB 理論入門 (上級編) という別の入門書が必要となる。
 - 16 下図は、Henk van Riemsdijk and Edwin Williams, *Introduction to the Theory of Grammar* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1986), p. 310 より。この本は、1986年の出版なので、障壁理論は取り入れられていない。
 - 17 Adrian Akmajian and Frank W. Heny, *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1975).
 - 18 この ordering paradox の話は、Adrian Akmajian and Frank W. Heny, *An Intro-*

duction to the Principles of Transformational Syntax の第10章の Exercise (E10.6) (pp. 396-97) から借りた。

ここで取り上げた ordering paradox の解消の例を詳しく説明すると次のようになる。

(a)の文の深層構造は次のようになる。

[John believes [John to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}

英語の Reflexivization (再帰代名詞化変形) は、同一名詞句が同じ単文内になければ適用できないから、まず、Raising (主語上昇変形) を適用して、埋め込み文の John を取り出し、主文の目的語にし、その後、Reflexivization を適用して、二つ目の John を himself に変えることになる。

[John believes [John to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}

↓ Raising

[John believes John [to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}

↓ Reflexivization

John believes himself to be an Arab sheik

従って、この場合の変形規則の適用順序は、

- 1) Raising
- 2) Reflexivization

となる。

一方、(b)の文の深層構造は次のようである。

[I believe [Mary to have hurt Mary]_{s2}]_{s1}

二つの同一名詞句の Mary は、両方とも S2 という埋め込み文の中にあるから、まず、Reflexivization を適用して二番目の Mary を herself に変えることになる。もし、先に Raising を適用すると、最初の Mary が主文の方へ移動してしまい、二つの Mary が同じ S2 という単文内に存在しないことになり、Reflexivization が適用できなくなるからである。

[I believe [Mary to have hurt Mary]_{s2}]_{s1}

↓ Reflexivization

[I believe [Mary to have hurt herself]_{s2}]_{s1}

↓ Raising

I believe Mary to have hurt herself

従って、この場合は、変形規則の適用順序は、

- 1) Reflexivization
- 2) Raising

となる。

この相反する適用順序という ordering paradox は、変形規則の循環適用ということを考えて見事に解消する。

まず, Raising と Reflexivization は,

- 1) Raising
- 2) Reflexivization

という順序で適用される。(a)の文は、次のように派生される。

S2 Cycle:

[John believes [John to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}
 ↓ Raising (does not apply)
 [John believes [John to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}
 ↓ Reflexivization (does not apply)

S1 Cycle:

[John believes [John to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}
 ↓ Raising
 [John believes John [to be an Arab sheik]_{s2}]_{s1}
 ↓ Reflexivization
 John believes himself to be an Arab sheik

(b)の文の派生でも変形規則の適用順序は同じである。(b)の文は次のように派生される。

S2 Cycle:

[I believe [Mary to have hurt Mary]_{s2}]_{s1}
 ↓ Raising (does not apply)
 [I believe [Mary to have hurt Mary]_{s2}]_{s1}
 ↓ Reflexivization

[I believe [Mary to have hurt herself]_{s2}]_{s1}

S1 Cycle:

↓ Raising
 [I believe Mary [to have hurt herself]_{s2}]_{s1}
 ↓ Reflexivization (does not apply)

I believe Mary to have hurt herself

19 Cf. Noam Chomsky, *Barriers* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1986).

20 Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory* (Oxford: Basil Blackwell, 1991), p. xvii.

21 *Ibid.*, p. xvii.

22 この異議に対するチョムスキーの反論はもちろんある。

- 23 荒木一雄・小野隆啓, 『英語の輪郭—原理変数理論解説—』(東京: 英潮社, 1991), p. 302.
- 24 Andrew Radford, *Transformational Grammar: A First Course* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), pp. xi–xii. ここで著者が言っている新しい本は、私が知る限り、まだ出版されていない。
この入門書に限らず、どんな入門書でも、それを終えたからといって、チョムスキーの著作をすぐさま全部理解できるものではない。
- 25 私の印象としては、学者として著名な人が書いた入門書は、概して、わかりにくい。学者としてはそれほどの業績をあげていない人(別の言い方をすれば、学者としてよりも教育者としてすぐれた人)の方が、わかりやすい入門書を書くようである。
- 26 中村捷・金子義明・菊地朗, 『生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ—』(東京: 研究社出版, 1989), p. iii.
- 27 今井邦彦・中島平三・外池滋生・福地肇・足立公也, 『一步すすんだ英文法』, pp. iii–iv.
- 28 荒木一雄・小野隆啓, 『英語の輪郭—原理変数理論解説—』, p. iv.
- 29 私の印象では、欧米で出版される入門書の多くは、教室で教えた講義ノートをもとにして書かれたものであり、また、出版前に教室で試用されている。